

竹田市周辺の山窩の住生活

鳥 養 孝 好

1

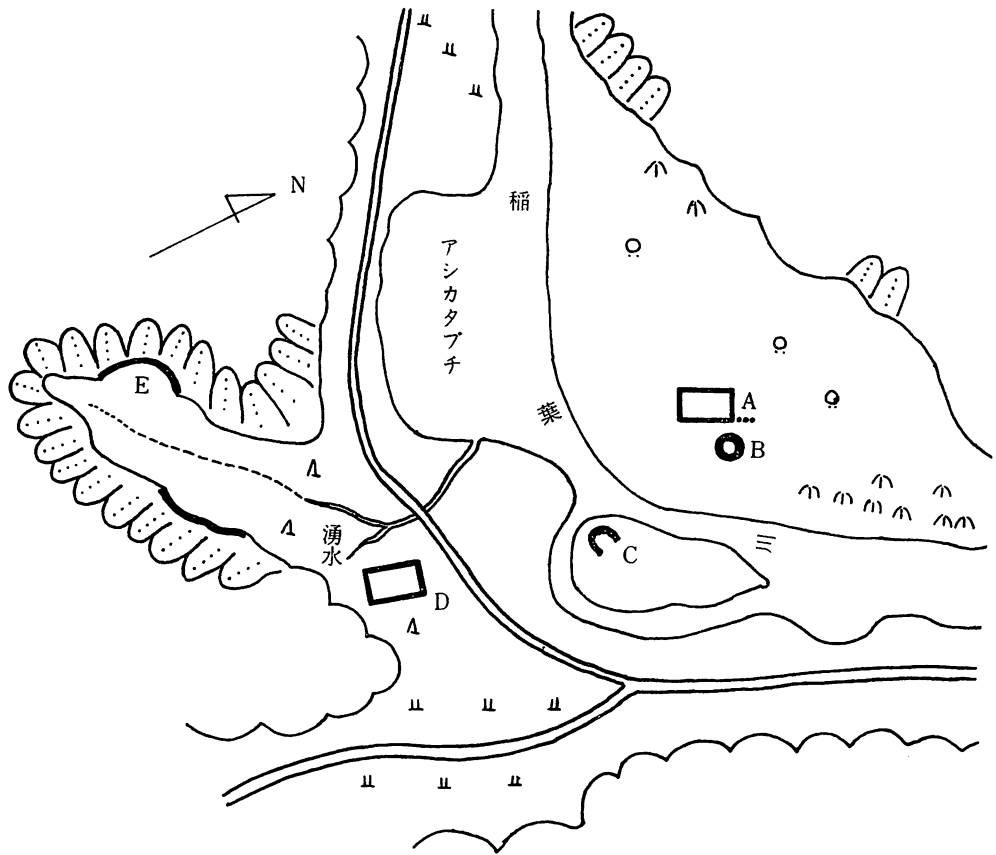
自然物の採集に依存する生活の中で、住生活についての様相は、農耕生活などの住居のそれと比較してみる時、両者の間には著しいへだたりがあるであろう事は、当然、推測される所である。考古学上の所見からも、旧石器時代はもとより、縄文時代においても、堅牢な竪穴式住居が一般化する中期—それ以前における住居の貧弱さは、中期以降のそれが農耕生活を前提とはしないにしても、極めて顕著な現象で、縄文前期以前のそれは、一箇所に居住する期間は、数年、あるいはそれ以上といったような、さほど長期にわたるものではあるまいと想像される。

また、人類の洞穴利用の住居は、ヨーロッパ旧石器時代のそれに代表されるごとく、極めて普遍的な現象であったと考えられているが、家屋の建築が始まって以降、また、農耕定住生活に入ってから以降は、民族学的な所見に照してみても、次第に稀有となり、極めて短期間の、それも特殊な利用であったという事ができよう。日本考古学協会、洞穴調査特別委員会の諸調査とその成果である、「日本の洞穴遺跡」においても、洞穴が住居に利用された事例は、縄文時代早・前期に多くみられるようである。

ところで、極めて移動性の高い生活構造で特に考古学上、家屋にせよ、洞穴にせよ、それぞれの調査は追々と類例を加えてきたものの、それぞれがどのように利用され、また家屋と洞穴の相互の関係がどのようなものであったかについて、その実態は明らかでない。たしかに、考古学の上でこれらを実証する事は困難が多いことは事実であるが、しかしまた、今後の調査に期待する所もまた大きいのである。

以上のような意味から、現代まで、極めて自然に依存した生活と、短期間の住居構営、洞穴利用住居という、原始的な生活を営んできた「山窩」の住生活の調査は、今後の考古学研究の多少の参考となりはしないかと考えて取り組んでみたのが、この小報告である。

山窩は、小説などによって猟奇的な面からのみ取りあげられ、一般からは極めて誤解されているが、特に竹細工に秀れた技能を伝承し、農具の箕の製作や修理を中心に、籠や笊を造り、あるいは川魚捕りなどを生業として「箕作り」「ポン」「ノアイ」「カンジン」「ヒニン」など、各地各様の名でよばれ、また、彼等自身は「テンバモノ」「タビニン」などと称し、漂泊的生活を送る人々で、近世には人別帳にも載らない賤民としての扱いを受けていた。その住居は極めて高い移動性のために、「セブリ」「トベ小屋」などという天幕や仮小屋に住み、場合によっては洞穴をも住居に利用するが、その一箇所の居住期間は多くの例で一・二箇月、永い例でも数箇月を越えない。



第1図 アシカタブチ周辺見取り図

これまで、山窩についての調査は、民俗学の立場から、農・山村調査に附随して行なわれ、特殊な生活と集団を構成する彼等との間に、猜疑心と警戒心が重なりあって、調査自身も、間接的な、農・山村民にたいする聞き取り調査にすぎなかった。

従って、皆目不明の部分が多く、特にその出自についても、原始生活の残存とするもの、異民族とするものや、中世における傀儡子と結びつけるものなど、実証性に乏しい所論が横行し、より正しくは、漂泊生活の内にも、農・山村、あるいは都市住民との係わりを保ちながら生活をする、木地屋、マタギ、タタラ師などの例から考え、また、農業社会の中から脱落してゆく人々を考える必要があるのであるが、山窩の調査自身にも残された問題は多い。

大分県の山窩についての調査も、進んでいるとはいいい難く、私自身のささやかな報告例もあるが従来の民俗学の立場からさほど脱けきったものではない。

こうした中で、今回は特に山窩の住生活のみに焦点をしぼってみたのであるが、幸か不幸か、当地方では、すでに箕などの農作業は機械力に替わり、籠は化学化学製品に押されて需要が減少し、手工業労働力は工場労働力に吸収され、山窩はその姿をみる事ができなくなっており、彼等は本来

の漂泊生活から定住生活に変わり、この小報告の資料としたのは、昭和二十八年のメモ、三十七・八年当時の小学生たちの記憶、そして極言するならばすでに過去のものとなってしまった生活跡の調査によるものである。

参 考 文 献

日本考古学協会、洞穴調査特別委員会「日本の洞穴遺跡」

日本民俗学会「日本民俗社会辞典——サンカ——大藤時彦」

竹田高等学校民俗クラブ「研究資料シリーズ第十一集——山窩・山の人生の一側面——鳥養孝好」

2

大分県竹田市周辺でも、二十年ほど前までは、山窩はしばしば見うけることができ、まだ人々の記憶からさほどまで遠ざかっていない。しかし、一般人の記憶は、箕の販売や修理に農家の庭先を訪れるそれを、努めて敬遠しながら垣間見た不確かな小屋掛の印象でしかない。

山窩の住居は、竹や藤葛など、竹細工の材料が採集しやすく、湧水などに恵まれる谷間に位置しあるいは河川敷などが選ばれることが多い。今回の調査の対象としたのは、大分県竹田市大字飛田川字田原＝別府湾に注ぐ大野川の支流である稲葉川の、通称「アシカタブチ」周辺のキャンプ地の例である。

大野川の上流域は、阿蘇溶岩が、深く河川の侵蝕を受けて垂崖をなし、蛇行する河流は小規模の沖積氾濫原を造り、蛇行弧状部ではしばしば溶岩が扶られ洞穴や岩蔭ができる。また、三層にわたる溶岩にサンドイッチされた粘土層は、風蝕によって小さな岩蔭をつくりやすい。こうした洞穴、岩蔭は縄文時代の住居、あるいは埋葬に利用されており、その調査も、古くは大野郡朝地町の稲荷洞穴、草木洞穴、新しくは直入郡荻町の野鹿洞穴、竹田市の鬼森洞穴などの例（1）をみることができる。この他にも、ゼネラルサーベによって洞穴遺跡と確認された例は十指に余るであろう。

アシカタブチ周辺は、S字状に大きく蛇行しながら東流する稲葉川の蛇行部に位置し、弦状部は氾濫原で、竹と灌木の荒蕪地になっており、河流に近い部分は礫原で全体として水捌けは良い。弧状部は溶岩の切り立った崖と、侵蝕による小さな谷間があり、小湧水がみられ、洞穴、岩蔭が幾つか点在している。

この一帯は、古くから山窩＝竹田地方でヒニンニのキャンプ地として知られている。ここに紹介するのは、昭和二十七年半から八年の初にかけての数ヶ月、比較的長期間にわたって滞留した一家族と考えられる八名の集団が、川をはさんで二棟の仮小屋を建て、更に一個の洞穴を住居として利用した例である。

この集団は、集団の中心となる＝家長と考えられる中年夫婦、その両親としてよい老夫婦、そして家長の弟夫婦と男女二人の幼児からなる構成で、移動はこの集団単位で行なわれ、彼等の説明によれば、一族でこの他にも一組の集団を作って移動しており、中年夫婦の子供は定住した山窩の家に預けて就学させているという。

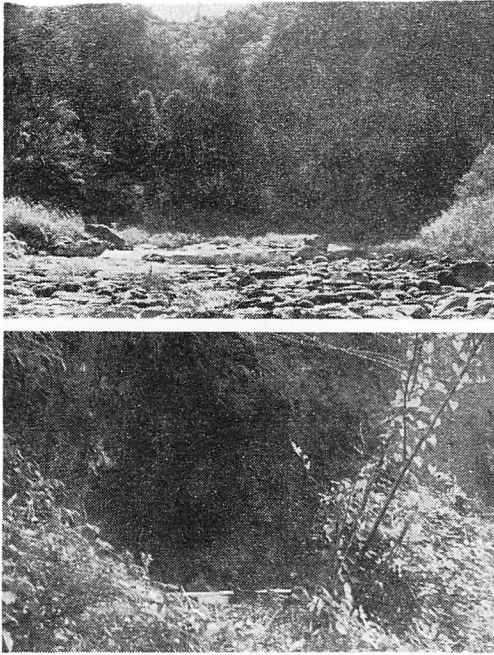


写真1 上 アシカブチシ辺全景
下 住居に利用した洞穴 (E)

火は常に絶やさない。入口附近に低い垣を結び、仮小屋から3~4mはなれた所に焚火が行なわれ、竹を切る木台を置き、作業所となっている。(図1-AB)

小流によって作られた洲の中に、共同炊事共同飲食のための炉が設けられ、夕食などはしばしばここを利用して行なわれる。しかし食事のすべてが共同飲食とは限らない。(図1-C)

弟夫婦と二児の仮小屋は、当時三十年生程度の杉立木を一方の棟持柱とし、他の一方を×字状の掘立柱にしたA同様のもので、平面は5m×3mである。(図1-D、写真2)

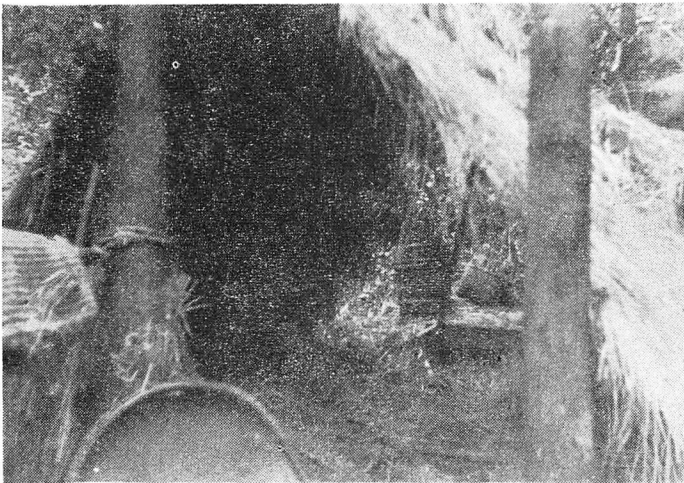


写真2 仮小屋 (D) 弟夫婦と二児の住む

この集団による一群の施設は、仮小屋を自らはトベ小屋と呼び、家長夫婦の住むオモヤと、インキョヤと呼ぶ老夫婦の洞穴住居、弟夫婦と幼児四人の仮小屋、そして附属の施設として、集団の共同飲食を行なうための石組みによる炉からなりたっている。

図一はアシカブチ周辺の見取図であるが、縮尺はほぼ1:400である。一群の施設については次にA-Eの個々についてふれてみたい。

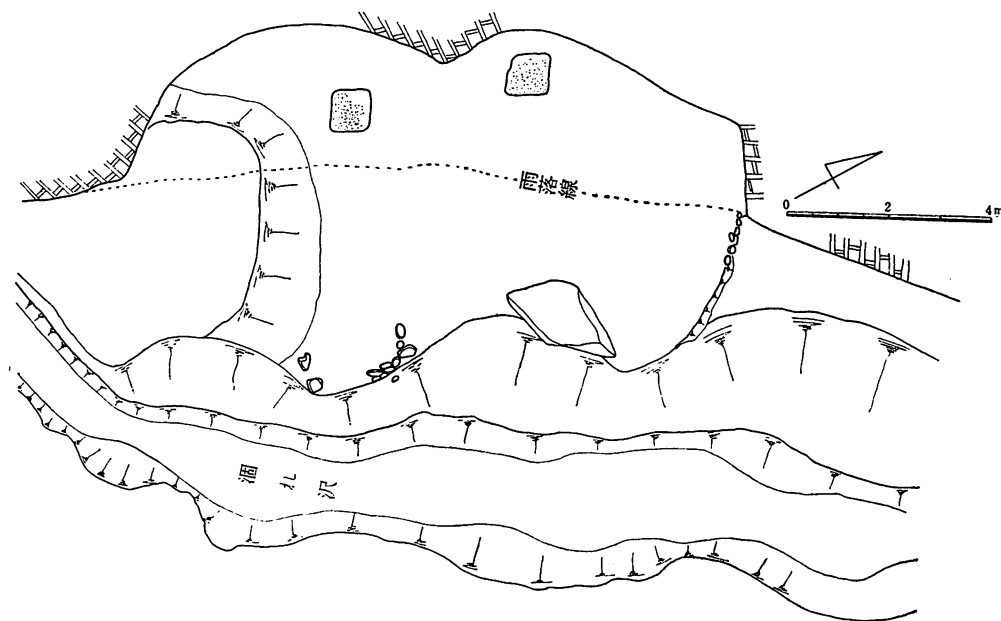
家長夫婦の仮小屋—オモヤは、蛇行弦状部の氾濫原の川添いにあり、X字状に掘立柱を組み、棟木を渡し、竹を極状に結び藁、笹などで屋根を地面まで葺き降し、南面する切妻の部分も竹を結び、藁で葺いてふたぐ。屋内の平面は8m×5m程度で、北面する入口近く、┐形に丸太を置き炉として、天井から鉤をつりさげ、

こうした仮小屋の住居は二・三箇月、永くて数箇月、附近一帯の箕の修理が終ると次のキャンプに移動してゆくが、移動にあたっては、そのままに残しておく、次の集団の利用に任せるといふが永くは残らない。写真撮影を好まないの、写真2—仮小屋Dは移動して二・三箇月後に写したもので、利用当時に比べて痛みが著しい。

一群の施設の中で最も興味深いのは、仮小屋と洞穴住居が併存することである。洞穴については後で詳述するが、洞穴左半分を雨落ち線に添う程度で竹を立て掛け、藁、蓆の雨除けをしつらえ、洞穴壁に鍋や食器類、竹細工道具などを置く、洞穴中央部よりやや右側に雨落ち線から約1mほど内側に三箇の河床礫を組み合せて炉を作り、煮炊や暖防の火に利用し、作業は主としてこの炉の周辺でおこなわれていた(1-E, 図2)。この洞穴の前に小さな溜れ沢があり、これをはさんで東側にも岩蔭があるが、ここは利用していない。

竹田市立豊岡小学校卒業生で、現、竹田高校三年生数名の言によると、昭和三十七・八年の頃にも、この洞穴に夫婦と二人の子供が一年以上にわたって住み、年令からすると前述の弟夫婦と二児と考えられる四名であるが、子供はこの期間を利用して近くの豊岡小学校一学年に編入、就学していた。二人の子供はすでに十二・三才となっていたが、これまで未就学であったらしいという。二年次の始に移動したが行先は明らかでなく、学校の記録など、検索する必要がある。

洞穴は稲葉川からの比高が約10m程度で、以前の杉木立は伐られ、現在は十年生ほどの杉が立っている。37・8年以降、全く利用する人もなく、下草が繁り、訪れるのも困難である。(2図)



第2図 竹田市大字飛田川字田原上洞穴平面

奥行2~3m, 横巾12m, 天井高は雨落ち線で5~6m, 全体にはゞ東面している。前方に2~3mのテラスがあり、溜れ沢に落ち込んでいる。左端部は1.3m程度のステップがあるが、以前は崩土で、引き担らしたものであろう。

洞穴奥壁は3字状に二つの部分からなり、37・8年頃の利用状況を実見したものはいないが、散在する丸太などが洞穴の左右の両端に偏在しており、洞穴中央に出入口を設け、洞穴左右に雨除け施設を施し、2個の房室が構営されたもののように考えられる。

左右2個の房室の区画をなす施設については何らの痕跡も残っておらず、あるいは当初から無か

ったと思われる。この2個の房室にはそれぞれ一辺が80cm程度の方形で、深さ15cmほどの炉があり炉には焼灰や炭が多量に残存しており、左側炉の奥には、奥壁に釘を打ち、鋼線を鈎状に曲げた鈎鈎が下げられている。

昭和28年の調査ではこの洞穴内には一個しか炉は設けられず、また、一家屋一炉跡——更にヒノトギを定める古い習慣などから類推すると、一夫婦と二人の子供のみの生活ではなく、更に一組のヒノトギを持つ——夫婦が同時に居住していた可能性を考えさせられるものがある。

この洞穴に、現在まで遺留されている品々によって当時の大部分を推定することは困難であるが洞穴左側には、漸類が整理されて並んでおり、一辺65cm程度の小卓が脚部を破損しながらも残存していることは、洞穴左側、特に炉を中心とした部分が、食生活を中心とした、生活の主要部分であった事を物語っている。右側炉跡に近く、木槌、鋸が残され、作業が行なわれた可能性を示しているのではあるまいか。灰や竹屑、などはテラスから漁れ沢に落ちこむ、約1.5mの傾斜面に多く見られ、同じ傾斜面は塵捨て場であった事を意味しており、山窩の洞穴住居の場合、洞穴の比較的前方に川ニナ、田螺の殻が層をなして堆積している事と照応するものであろう。

また山窩の就寝は、昭和28年の例では、炉に火を絶やさず、その周辺を丸太で仕切って、直土に藁を敷き、夏・冬の区別なく毛布程度を掛けて、大人も子供も重なりあうようにして就寝し、寒気に対する苦痛はさほど感じているようには思えなかった。

3

上記のように自然に依存し、漂泊の生活を続ける山窩の生活、特に住生活は、極めて単純、かつ原始的なそれであるが、洞穴利用の住居を中心に、いくつかの特色を指摘することができようである。

- 1 小屋掛、洞穴住居を併用すること。
- 2 短期間、反復利用されること。
- 3 洞穴、仮小屋も狭いながら利用上の区分や、慣習があること。
- 4 同一住居の内に、二夫婦以上の共同居住もあり得ること。
- 5 洞穴住居には雨除け施設を設ける場合のあること。
- 6 洞穴住居の炉は雨落ち線内側にあること。
- 7 夫婦単位、炉を中心とした一群の住施設の他に、共同飲食の施設を持つこと。

特にこのような山窩の洞穴住居は、ひとりこの田原洞穴の例のみならず、竹田市周辺には、他にも数多くの例が知られており、次に幾つかの代表的な洞穴を紹介しておきたい。

直入郡荻町大字南河内 野鹿洞穴

昭和47年9月6日から10日間にわたり賀川光夫教授、新潟大学小片保教授を中心に発掘が行なわれ、縄文前期および後期の洞穴利用について新しい資料を加えたが、この洞穴は部分によっては、40cmにもわたって近世・近代の攪乱が見られ、攪乱層中から寛永通宝、文久永宝、半銭などの貨幣類、近世・近代陶器片、瓶類破片、加工竹片、泥亀甲羅などが発見され、この攪乱が中世以降にお

ける山窩の利用によるものと考えて良く、洞穴中央からやや左側の奥壁近くに、経80cmほどの楕円形の炉跡が基盤に浅く掘られて残っていた。

竹田市大字岩本、不動岩洞穴

奥行7～8m、巾40m以上にわたり、高さも15mをはるかに越える大洞穴で、ほぼ南面しているが、左側の3分の1は近世の墓地、中央部から右側が山窩の住居として利用されている。墓地と住居の境目にあたる部分は、土取り作業のために大きく抉りとられているが、わずかに残る部分に縄文早期、押型文の遺物が獣骨片とともに見られる。この洞穴も、古くから山窩の利用する洞穴として知られていたが、昭和30年頃から、洞穴内に、比較的堅牢な小屋を作って定住し、43年頃まで利用し、竹細工、炭焼きや農作業の日傭取りに出ていたという。この洞穴の場合、定住生活であったため、貯水槽、物置、風呂、物干、便所などの施設を洞穴各所に配置して利用していた。

竹田市大字米納、鬼森洞穴

47年10月2日から一週間、賀川教授によって、縄文晩期の遺跡として調査されたが、洞穴ほぼ中央に炉跡があり、また奥壁中央に石を粘土で固めた炉も残っているが、古くは小供たちが籠って正月行事として飲食を行ない、また昭和23年頃、中年の男が住み、鋤掛屋を生業としていたという。但し、この土地では、山窩は河原に小屋掛をするので、この洞穴を利用した人物は違っており、中等教育程度は受けていたらしいといっているが、鋤掛屋も山窩の生業の一種であった事も知られている。

大野郡緒方町大字越生 越生洞穴

大野川に添った小さな谷あいの岩壁に連続する岩釜と洞穴があり、古くは小さな社もあったらしいが、岩釜部にはわずかな陶器片が散布し、洞穴部には厚い焼灰と、層をなす川ニナ、田螺が堆積し、これに混って陶器片やボタン、鋼線を曲げた釣鉤などが見られる。

大野郡大野町大字夏足、夏足洞穴

大野川の本流、沈墮ダムのわずか上流の切り立った崖の中腹に、わずかな谷が刻まれ豊富な湧水があり、夏足部落簡易水道の水源となっているが、この水源の傍に厚い焼灰の堆積があり、川ニナ、田螺が混り、下層には寛永通宝、上層にガラス片、庖丁などが発見され、永い年代にわたる洞穴利用の跡をたどることができる。

以上のような事例は、洞穴遺跡のゼネラルサーベの副次的な所見で、詳細な記録は残されていない。しかし、山窩の利用した洞穴は「ヒニン穴」などと俗称され、私の直接に調査した例だけでも三十数例あり、伝聞を加えると50例に近い。

4

山窩の洞穴住居の例は、特に九州に多い習慣で、関東地方などにはその例はなく、また関東地方に主体的であるテント式住居は九州に未だ例を聞かない。おそらく、一般に山窩と呼ばれている人々の生活も、地方差の著しいものがあるに相違はないのであるが、少なくとも竹田市周辺では、洞穴住居を核として、仮小屋を造る例が一般的で、山窩のキャンプ地として知られる場所は、少なく

とも一箇所以上の洞穴を中心としているのである。

その生活は極めて単純で原始的であるため起源を先史、古代に求める人々もあるようではあるが現在までの所、寛永通宝を溯る例は知られていない。先に、旧石器時代の人骨を発見した大分県南海部郡本匠村、聖岳洞穴の中世人骨の出土例（註2）は、山窩が洞穴内に埋葬したと思われる例は知られていないが、興味深い報告である。

山窩の出自は現在、全くの不明ではあるが、その言語、符牒の類には、農・山村や香具師などのそれが多く反映しており、あるいは一般社会から閉め出された人々の、時代相に応じた生業が選ばれた事も考えられ、農・山村住民とわずかな接触を保ちながら維持されてきた、原始的と思われる生活は、すでに山野のきびしい所有権の主張にさえぎられて、こうした生活をとりざるを得なかったものと推測されるのである。

ともあれ、山窩の生活は、もはや実際に調査することは不可能に近い。明治の末年の頃から定住生活に入り、家屋を構え、作業小屋を持って竹細工を営んだ人々も、一般の人々からも差別を受けながら、すでに高等教育を受け、あるいは公務員として信頼を得ている例もあり、新しく定住生活に入った人々もすでに農地を保有し、農民としての生活に同化してしまった例もある。

望むらくは、山窩であった人々に対するいわれのない差別が消え去り、また、われわれとしてその差別を消し去らなくてはならない義務を痛感するのである。

註1・2

大分県地方史 34号

「聖岳洞穴遺跡——後藤重巳」

「稲荷岩蔭遺跡発掘調査報告——羽田野一郎・酒匂義明」

「大野郡朝地町草木洞穴の調査——鈴木重治・鳥養孝好」

日本の洞穴遺跡

「大分県聖岳洞穴、大分県大恩寺稲荷岩蔭・大分県草木洞穴——賀川光夫」

執筆 者 紹 介

八 幡 一 郎	上智大学文学部教授
内 藤 芳 篤	長崎大学医学部教授
西 谷 正	福岡県教育委員会技官
渡 辺 誠	平安博物館助教授
鳥 養 孝 好	竹田高等学校教諭
坂 田 邦 洋	長崎大学医学部助手
清 水 宗 昭	大分県教育委員会技官
二 宮 忠 司	福岡市教育委員会嘱託
賀 川 光 夫	別府大学文学部教授
小 田 富士雄	別府大学文学部助教授
橘 昌 信	別府大学文学部講師
小 池 史 哲	別府大学考古学研究室

考古学論叢

第1号

昭和48年3月25日 印刷

昭和48年4月1日 発行

編集者 賀 川 光 夫
発行者

印刷者 中 尾 芳 郎

日の丸印刷株式会社

別府市中央町9-15

発行所 別府大学考古学会

別府市北石垣八二

別府大学文学部内